O1-031

漏斗胸Nuss法手術を受けた子どものQOLの変化 －子どもと親の捉え方の違いに対する考察－

中新 美保子[1]、難波 知子[2]、井上 清香[3]

[1]川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科、
[2]川崎医療福祉大学　医療技術学部　健康体育学科、
[3]川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　保健看護学専攻

【目的】
漏斗胸（Nuss法）手術が日本で実施されるようになって16年が経過し、手術手技は格段に進歩し、リハビリや看護ケアも整備されてきた。本研究では、子どもと母親に対して実施した手術前後のQOL調査の結果を比較してその違いを明らかにし、若干の考察をすることを目的とした。

【方法】
調査方法：Lawsonらが開発したPectus Excavatum Evaluation Questionnaireを日本語に翻訳した無記名自記式質問票を用いて、手術前と手術後1年経過時点に過去6か月以内を思い出して回答を求めた。調査期間は2013年4月～2015年7月であった。
分析方法：子ども14項目、母親16項目について各々の手術前後の変化を比較した（Wilcoxon signed-rank test、P＜0.05）。
倫理的配慮：A病院の倫理審査委員会の承認を受けた。

【結果】
＜子ども＞「自分の姿の感じ方」「裸になった時の感じ方」「友達から胸のことでからかわれる」「胸のことを周りの人に見られないようにする」「胸のことで困ることがある」「胸が他の人と違っているために気になることがある」「胸のことで嫌だと感じる」の7項目で、術後QOLは上がった。また、「息がはぁはぁすることがある」「体育の授業を休むことがある」の2項目で、術後QOLは下がった。
＜母親＞「息切れがあった」「疲れやすい」「体重が増えなくて困る」「からかわれている」「水着を着ることを嫌がる」「人前での着替えを嫌がる」「子どものこれからの生活について気がかりなことがある」の7項目で、術後QOLは上がった。また、「身体を動かすと困ることが起こる」「走ったりすると胸の痛みを感じる」「運動が思うようにできない」の3項目で、術後QOLは下がった。

【考察】
身体的イメージに対しては、子どもも母親も術後QOLは向上したと捉えていた。身体的苦痛に対しては、子どもは息切れがあり体育を休む状況からQOLは下がったと捉えていた。しかし、母親は、術後1年時点でも依然痛みがありQOLが上がっていないことを感じながらも、息切れや疲れやすさ、体重の増加については術前と比較してQOLの向上を認識していた。身体面のQOL、特に呼吸に関する息切れについては、子どもと母親の感じ方に差があることから、術後の訴えは母親の代弁ではなく子どもの訴えを大切に聞き取ることが医療者には重要である。

本研究は、科学研究費（基盤研究C，No24593421）の助成を受けて実施した。

O1-032

特別支援学校に勤務する看護師が役割を遂行するために実践している内容

入江 千恵[1]、塩飽 仁[2]、鈴木 祐子[2]、井上 由紀子[2]

[1]地方独立行政法人宮城県立こども病院、
[2]東北大学大学院医学系研究科小児看護学分野

【はじめに】
近年、特別支援学校に勤務する看護師（以下学校看護師）の数は増加傾向にあるが、学校看護師が役割遂行のために実践している内容は明らかになっていない。

【目的】
学校看護師が役割遂行のために実践している内容を明らかにする。

【研究方法】
ある県の学校看護師を対象に、2014年7月から12月にインタビューガイドを用いて半構造化面接法で調査を実施した。インタビューガイドは、学校看護師として役割を果たすために実践していることや、必要な知識と技術を主な質問内容として構成した。得られたデータを質的帰納的に分析し、分析結果を小児看護の研究者かつ臨床経験者8名で合議し，信頼性と妥当性を高めた。調査は調査者の所属機関の倫理委員会の承諾を得て実施した。

【結果】
調査を依頼した14名の学校看護師のうち同意が得られた12名に面接を実施した（応諾率85.7％）。学校看護師が役割を遂行するために実践していることに関する語り全268記録単位を分析し，《働きながら役割を探る》《特別支援学校で働くことに慣れる》《学校内外の関係職種と連携する》《母親と協同する》《特別支援学校での看護の特徴を理解する》《譲れないことと妥協できることの区別をつける》《学校で看護師としての意志を伝える》《特別支援学校に勤務するまでに培ってきた看護師経験を活かす》《特別支援学校の環境の中で学ぶ》《研修に参加する》《看護師自身の身を守る》《特別支援学校の中での危険を把握し事故予防に努める》《登校してくる子供の体調を許容する》《レスパイトではないことを意識する》《現行の体制の中で働き方を調整する》の15カテゴリと41サブカテゴリが抽出された。

【考察】
学校看護師は役割遂行のため、病院とは異なる学校での看護の特徴を把握し、その中で譲れない点と妥協点を判断しながら看護師として意志を伝えるよう努めていた。また、自身の看護師経験を活かすとともに研修を活用しながら学校の環境の中で学ぶといった継続学習により必要な知識や技術を獲得していることが明らかになった。登校する子供の体調については学校看護師間でも許容するべきか否か意見が分かれており、判断基準の曖昧さがうかがえた。以上より、学校看護師の役割遂行を補助するために、学校における看護の特徴と必要な知識・技術を学ぶ機会の提供や、登校できる体調の基準を含め、関係職種や家族と看護師の共通理解の確立が必要であると示唆された。

Presented by Medical*Online